



「くっ……終わった終わった」

今日の分の仕事を終えて、俺は椅子に座ったまま大きく伸びをした。

なんだか長い一日だった気がする。

真貴子がやって来るなんてハプニングがあったから、どっと疲れてしまった。

あの後、周りに事情を説明するのにどれだけ時間がかかったか。

美紗子の口添えもあって『みんな友達』ということにはしたけど、納得してない同僚も多かった。

まあ、すぐに興味なくして忘れるとは思うが……。



「荒浜さん、終わりですか？」

「おう、そっちもか？」



「はい」

「それじゃあ……一緒に帰るか」



「はいっ」



「それにしても、荒浜さんにはびっくりしちゃいました」

会社を出てオフィス街を抜けて、駅前を歩いているところで美紗子がぼつりと言った。

辺りはもう真っ暗で、少し肌寒い風が吹いている。

「なにが？」



「あの人の……真貴子さんの誘いを断わったことです」

「受けると思ったのか？」



「……ちょっと」

美紗子が苦笑いを浮かべる。

たぶん、嬉しい気持ちとホッとした気持ちが混ざり合って、そんな表情を作り出しているのだろう。



「いつもお金が欲しいとか樂をしたいとか、そんなことばかり言ってるから……」

「別に嘘じゃない。樂したいし金はほしい」

「ただ、会社ひとつポンと持って来られて、あなたが今から副社長よって言われてもな」

「正直、そんな重そうな肩書きを求めてるわけじゃない」



「そうですね。副社長の荒浜さんって……似合いません」

「だろ？」

そう言って、2人で顔を見合わせて笑う。

こういう楽しい時間とか安らぎとか、結局のところ俺が欲しいのはそういうものなんだよな。

こうやって適当に笑って生きていけたら、きっと俺は満足なんだ……。

「だからまあ、こんな話を蹴るくらいだから、俺と一緒にしても優雅な生活はできないぞ」



「そんなの初めから期待してません」

「そういう期待がないのに、俺とは結婚したいのか？」



「それとこれとは……話が別です」

「お前さ、どうしてそこまで俺がいいんだ？ 本気で恋愛するなら、今からだって遅くないだろう」



「……それ、本気で言ってます？」

あ、美紗子が少しイラッとしたときの顔だ。

軽く地雷踏んだらしい。

「お気に障ったのなら申し訳アリマセン」



「もう……」



「荒浜さんにそのつもりがなかったとしても…… 私の勘違いだったとしても……私は今まで恋愛してきたつもりなんです」



「私はいつかこの人のお嫁さんになるのかもって思いながら、お付き合い……してきたつもりなんです」



「だから、そんな簡単に他の人に目なんか向きません」

「……そうか」

ここまで言ってもらえるのは、本当にありがたい話だよな。

色々身の回りの世話してくれたり、親切な娘だって思ってたけど、あれは恋人に尽くしてくれてたことになるんだな。

勘違いさせた責任は……やっぱり取るべきなんだろうか。



「はい、できましたよ」

俺の部屋に戻ってすぐ、美紗子は晩飯の支度をしてくれた。

コンビニで買ってきたものもあるが、半分は冷蔵庫の残り物から作ってくれた。

「うまそうだな」



「おかわりありますから」

「サンキュ」

用意してもらった食事に箸をつける。

料理の味は文句のつけようもない。

改めて考えてみると、美紗子ほど料理のできる女はそうはいないのかもしれない。

「もぐっ……もぐっ……もぐっ……」



「……………」

「ん、なんだ？ 人の顔をじっと見て」



「いえ、美味しそうに食べてくれてるから嬉しくて」

「そりゃあ本当にうまいからな」



「ありがとうございます」

「いや、礼を言うのはこっちだろ」

こうやって考えてみると、本当に世話してもらってばかりだな。

俺も何か返したほうがいいんだろうが、生憎とできることが少ない。

そもそも、そういうのを考えるのも面倒だったから、セックスフレンドの関係でいたかったんだよな。

特定の誰かのために、とかは俺には無理だ。

無理だと思うんだが……。

「……………」



「荒浜さん？ どうかしたんですか？」

「ん、いや……」



「もしかして、口に合わない料理でもありました？」

「いやいや、そうじゃない。料理は本当にうまいんだ」



「それなら……いいんですけど……」

「ただ……こう、何もしてやれることがないなと思ってな」



「してやれることがない？」

「俺から美紗子に対してな」



「そんなことはないですよ。私だって、たくさん荒浜さんのお世話になってます」

「俺が？ 何かしたか？」



「はい、いっぱい」



「でも……自覚がないみたいだし、教えてはあげません」

「なんだそりゃ」



「ふふっ」

美紗子が楽しげに笑みを浮かべる。

なんだかよくわからない。

俺が美紗子にしてやってること？

なんかあったっけ？



「ほら、考え事しないで食事してください。冷めちゃいますよ」

「あ、ああ……」

美紗子に促されて食事を進める。

まあ、いずれ答えを聞かせてもらえばいいか。

今は目の前の食事を美味しくいただくことにしよう。

「もぐっ、もぐっ、もぐっ……」



「はむっ……はむっ……はむっ……」



「……あの、荒浜さん」

「ん？」



「私は……こうして食事を作りに来たりするのは時々でしたけど、他の人達も同じようなことしてたんですか？」

「俺のうちに来て、飯を作ってくれたりってことか？」



「はい」

「いや、美紗子だけだ」



「……本当に？」

「もちろん、一緒にどっかで飯を食ったりすることはあるが、こうしてうちに来て料理してくれるのは美紗子だけだよ」



「そうですか」

美紗子が嬉しそうに口元をほころばせる。

なんていうか、本当に良い女だ。

正直、俺にはもったいないんじゃないかって、そんなふうに思ってしまった。

でも……手放したくはなかった……。



「荒浜さん、片付け終わりました」

「おう、サンキュ」

食後、俺がテレビを観ている間に、美紗子が食器の片付けを済ませてくれた。

本当に何から何まで世話になりっぱなしだ。

頭が上がらない。



「部屋もだいぶ散らかってきてますね」

「これはこれで落ち着く」



「もう……」



「また、時間のあるときに……片づけに来ますね？」

「よろしく」

「……と、言いたいところだが、いいのか？」



「いいんです。これ以上汚れると私が落ち着きませんから」

それなら、お言葉に甘えましょう。

互いの認識が違っていたとはいえ、無理に関係を変える必要もないんだ。

美紗子が来てくれると言うのなら、それを拒む理由はどこにもなかった。

「まだ、時間あるか？」



「はい、大丈夫です」

「じゃあ、こっち来いよ」



「はい」

美紗子がそっと身を寄せてくる。

こうして肩をぴったりと合わせてテレビを観るのが、俺達にとって至福の時間だった。

もっとも、テレビを真剣に観てるかと言えばそうじゃない。

美紗子は俺のほうに完全に体を預けてしまっていて、それはつまりOKのサインだった。

「いいのか？」



「えっ？ その……今日はしないんですか？」

「いや……できるならしたいが……」

「ただ、俺達は美紗子が思ってたような関係じゃなかったわけで……それがわかってても……していいのか？」



「ふふっ、荒浜さんって変なところで真面目ですよ」

笑われてしまった。

結構大事な話をしたつもりだったんだが……。



「もちろん、今までと同じというわけにはいきません」



「私は恋人のつもりで……今まで抱かれてましたから……」

「だよな」



「でも、仕方ないじゃないですか」



「荒浜さんには他にも女性がいて……その人達とは、するんでしょう？」

「まあ、な」



「だったら、私に選択の余地はありません」



「あの人達に負けないように、私は私にできることをやるだけです」

そう言って、美紗子が口元に小さな笑みを浮かべる。

俺とこうしてることに、後悔とかは一切ないみたいだ。

だったら、俺も無闇に気にする必要はない。

美紗子とは、今まで通りに付き合っていくだけだった。

「それじゃあ、遠慮はしないぞ？」



「……はい」



「あ……」

布団の上へ、美紗子の体を押し倒す。

あとは……いつも通りの流れだった……。



「ん、あっ……！」

美紗子の体を自分の上に跨らせて、目の前にあった胸を鷺掴みにした。



「はあぁっ……ん、う……恥ずかしい……」

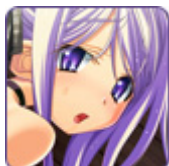
「恥ずかしい？ 何が？」



「だって……こんな、格好……んんんっ……！」

胸の膨らみを揉まれて、美紗子の体がぶるりと震える。

指先で乳首を擦り付けると、絞り出すような声が漏れた。



「は、ふぁっ……んっ……あぁっ……！」

うっとりとした表情が可愛い。

普段、会社でテキパキと働いてる姿を知ってるからこそ、セックスの時のギャップには心躍るものがあった。

「気持ちいいか？」



「はい……気持ちいいです……」

「美紗子も動いてくれよ。マンコでチンポ擦ったりしてな」



「そういう……恥ずかしいこと、言わないで……ん、あっ……！」



「こ、こういう、感じで……くふっ……いい、ですか？」

美紗子が腰を前後に動かして、マンコの肉でチンポを擦り付けてくる。

決して強い快樂があるわけじゃなかったが、いやらしさは充分に感じる事ができた。

「そうだ。そんな感じで……いいぞ」



「はい……ん、あっ……熱い……」



「こんなふうに、するだけでも……んあっ、こんなに、硬く……」

美紗子の視線が、時々チンポのほうに向けられる。

実のところ、未だに恥ずかしがってまじまじとはチンポを見たことがないのだ。

俺に気づかれないうちに、ちらりとチンポを盗み見るような初々しさが美紗子の魅力のひとつだった。



「あ、ふっ……乳首、は……ああっ……」

「乳首を触られるのが気持ちいいだろ？」



「はい……んんっ、乳首、気持ちいい……」



「あっ……あ、あっ……ああっ……あっ………！」

乳首を刺激するたびに、美紗子の口から声が漏れる。

上半身をクネクネと動かすさまが、とてもいやらしかった。

胸の膨らみも適度な大きさがあるから、揉みごたえも充分だ。

手のひらに吸い付くような感触がたまらない。

指を曲げて弾力を楽しんでいると、美紗子の吐息が熱を帯びていった。



「はあっ……あ、あああっ……はあっ………！」



「体が……ん、はっ……熱い……んんうっ………！」

「こんな感じでいいか？ それとも、もっと何かしてほしいか？」



「ん、んんうっ……」

「もう我慢できなかつたりするんじゃないのか？」



「そ、そんなこと……ふああっ!？」

俺のほうからも腰を動かしてやると、美紗子が引きつったような悲鳴を上げた。

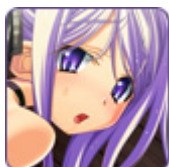
チンポとマンコが擦れ合って、心地良さが広がってきた。

「どうした？ 欲しいんじゃないのか？」



「も、もう……んくっ、そんな……あ、いじわる、ばっかり……」

「いじわるで結構。欲しいのか、欲しくないのか……どっちだ？」



「ん、くうっ、ほ、欲しいです……」



「荒浜さんの、おちんちん……んんっ、欲しいです……」

顔を真っ赤にしながらも、美紗子が俺のチンポを求めてくる。

視線はちらちらとチンポに向けられていて、その仕草が可愛らしくて仕方なかった。



「お願いします……んんっ、おちんちん、あ、ふあっ…… おまんこに、入れてください」

「いいぞ。少し腰を浮かしてみな」



「は、はい」

俺の言った通り、美紗子が少しだけ腰を浮かせる。

そこへ、勃起したチンポを滑り込ませて――



「んくあああああああツツ！！！！」

美紗子のマンコに、下からチンポを突き入れる。

柔らかな肉ヒダが一斉に包み込んできて、奥のほうへと吸い込んでいった。

「んっ……！」



「は、あっ！ 入って、きて……あ、んんうっ！！」

「くうっ！」



「んくううっ！ 奥に、当たるっ……ん、んんうっ、響く……ッ！」

子宮を突き上げられた刺激に、美紗子が体を仰け反らせる。

膣壁はかなり強めに締め付けてきて、俺の下腹部に快感を広げていった。



「はあっ……あ、ああっ…… おちんちん、んんっ、当たる……ん、くっ……！」



「お腹の、奥に……ずんって……あ、あああっ、すごい……あふああっ！」

「今日は美紗子が動いてくれよ。この体勢だと、俺は動きにくいからな」



「ん、んんっ……はい……」



「んっ……んうっ……く、ふうっ………んんっ………！」

美紗子が両脚に力を入れて、下半身を上下に動かし始める。

膣壁にチンポの表面が擦られて、心地良さがじわじわと広がってきた。



「あ、んふっ……く、うんっ……ん、ん、んんっ………！」



「こういう、ん、くっ……感じで……ああ……いいですか？」

「ああ、そんな感じで……いいな……」

「ただ……もう少し早くても、いいかもな」



「んんっ、くっ……こう、ですか？ あ、あ、あああっ！！」

美紗子が下半身を動かして、俺のチンポを刺激してくる。

まるで、フェラチオするみたいに肉ヒダが吸い付いてきて、心地良さが一気に高まっていった。

「そのくらいが、いいな……そのまま続けてくれ」



「はい……ん、んっ……んうっ……！」



「あ、あぁっ……おちんちん、大きく……んうっ……………」

チンポとマンコが擦れ合う快感に、美紗子が甲高い声を漏らし続ける。

唇からは熱い息が吐き出されて、普段にはない色っぽさが漂っていた。

顔に浮かぶ表情がいやらしい。

潤んだ瞳はどこか切なげで、俺の興奮を高めてくれていた。



「はぁ、んっ……ひぁ、ん、あ、あっ……んあぁあっ！」



「気持ち、い、ひいんっ……んんっ…… おまんこ……気持ちいい、です……ッ！」

「俺も……いい感じ、だ……」



「荒浜さんも……んんっ、感じて、ますか？」

「ああ、いいぞ……かなりいい……」



「ん、あっ、うれし、い……ふぁあんっ！」



「んうっ、く、ふうっ……ん、んんっ、うっ……んんんううっ！！」

美紗子の体が上下に揺れるたびに、汗の雫がほとばしる。

チンポの先端に何度も子宮が当たってきて、そのたびに心地良い刺激が伝わってきた。

射精にはまだ遠いが、確実に近づいているのを感じる。



「ひ、ふあっ……あ、んっ……んんっ……んうううッ！！」



「胸え……んあっ、おっぱい……あ、ああっ…… そんなに、強く、ひああんっ、揉んじゃ、ああ……ッ！」

「乳首が、ものすごく硬くなってるな」



「あ、ふあっ……そん、な……んんっ、コリコリ、したら、あ……ッ！」

「くっ……んっ……！」

チンポが絞られるような感覚が広がる。

先端から根元まで、まるでフェラチオされてるみたいに気持ち良かった。

美紗子は腰をくねらせながら動いていて、どこか踊っているようにも見える。

結合部からは愛液が滴っていて、いつの間にか俺の股間はぐっしりと濡れてしまっていた。



「んくっ、う、ひうっ……あ、ふ、ああっ……んはっ、あ、ああああっ！」



「気持ち、いいっ……んんっ、おちんちん、あ……擦れて…… あ、ふああっ……気持ちいいっ！」

「本当に気持ち良さそうだな」

「乳首も……こんなになってるぞ」



「んんんうっ！ ち、乳首っ……ああっ、摘んじゃ、ふああっ……だめっ……だめえ……ッ！」

親指で乳首を転がすと、美紗子の体がビクビクと震えた。

思わず逃げようとしたみたいだったが、俺はしつこく追いかけた。



「荒浜、あ……さんっ……ん、ん、んんっ……！」

「気持ちいいだろう？」



「は、い……ひいんっ……気持ち、い、いいい……ッ！」



「おっぱい……ああっ、ち、乳首、い…… ん、んんっ……すごく、感じます……ッ！」

「もっと腰も振ってくれよ。この程度じゃイけないぞ」



「んあっ、う……でも……」

「そのほうが美紗子も気持ち良くなれるだろう？」



「ああ……」

美紗子の体から力が抜ける。

ここで我慢しても意味がないと、そんなことを悟ったみたいな顔だった。

そして――



「は、あっ……んあっ、ひっ……はあああ……………ツ！」

美紗子が恍惚とした表情を浮かべながら、今まで以上のスピードで腰を振り始める。

まるで自分の股間を叩き付けるように、マンコでチンポを擦り付けてきた。



「ああっ、気持ちいい……ん、んんっ……お、おまんこ、気持ちいいっ！」

「ん、くっ……いいな……良くなってきた」

「チンポが、すごく感じるな……」



「はふあっ、あ、ああっ……ん、ひあっ、お、奥に…… んんっ、子宮に、当たる……ふあああっ！！」



「おちんちんが、んうっ、ずんって、当たって…… ん、ん、んんうっ、お腹の、ほうに……はふあっ、ひ、響くう……………ツ！」

「くうっ……！」

乱暴と言ってもいいくらいの勢いで、美紗子が上下に腰を動かす。

俺の下腹部には何度も強い衝撃が襲ってきて、チンポの皮が破れるかと思うほどに擦り付けられた。

官能は緩やかに高まっていく。

射精感がじわじわと込み上げてくる。

チンポは痛いほどに硬くなって、美紗子のマンコに揉みくちやにされていた。



「んひあっ、ふ、あっ……んんっ……んううっ……！」



「熱い、はあっ、体が、あ……ん、あっ……体が、熱い……ッ！」



「心臓が、ん、くっ……ドキドキして、あ、ひああっ、頭…… くうんっ、へ、変に、なっちゃいそう……ッ！」

「んんっ……そろそろ、俺も……動いてやるか……ッ！」



「ひあああッ！？ あ、あああああああッツ！！！」

俺は腰を跳ね上げ、勃起したチンポで美紗子のマンコを突き上げた。

カリの部分が膣壁を擦りながら、勢いよく子宮にチンポを叩き付ける。



「ふあっ！？ 荒浜、さっ……んひいいいいッ！！！」

「このほうがお互いを感じられるだろ？」



「それは……んひゃっ、あっ、でも……ん、あああっ……！」

「それとも、嫌いか？ 止まったほうがいいか？」



「あ、だめっ……んんうつ、と、止まらないで、く、くださっ…… ひゃああんっ！？」

「んっ……！」

美紗子のマンコから、グジュッと愛液が染み出してくる。

反応こそ乏しかったものの、軽く絶頂に達してしまったらしかった。

チンポを突けば突いた分だけ、湿った音が辺りに鳴り響いた。



「んあっ！？ ひ、ふあっ……ん、あ、あっ……す、すごい……ッ！」

「聞こえるか？ これは……美紗子の音だぞ」



「あ、ああっ、そういう、こと……んんっ、言わないで…… あ、ふあっ、んあああっ！！」

「くうっ、どんどん、締め付けてくるな」



「はひっ！？ ひ、んっ……あああんっ……っ、強い……ああっ……！」



「おちんちんっ……ん、んんうつ、突き上げ、られ…… ああっ、子宮っ……子宮にい……ッ！！」

甲高い悲鳴を上げながら、美紗子が必死に腰を振り続ける。

俺の動きに合わせるようにして、下腹部を上下に揺らし続けた。

チンポとマンコはリズム良く擦れ合って、射精感がグングン高まってくる。

いっそのまま出してしまいたくもなったが、そこはぐっと我慢した。

もう少しだけ、この快感を味わっていたかった。



「ん、はあっ、あ、ひあっ…… ん、ん、んんうっ……くうううっ……………！」

「く、うっ……んっ……！」



「気持ち、い……ひあんっ……おま、んこ……とろけ、そ…… ん、んんっ……………！」



「おちんちん、あ、ふあっ、熱くて…… ん、あっ……硬くて……あああああっ……………！」

「そろそろ、イきそうだ……くっ……！」



「イ、イって、くださ……ひゃんっ……！？」



「私のっ、あ、ふあっ、私の中で……ん、んんうっ、い、いっぱい…… ああっ、いっぱい、気持ち良く、なって下さいっ！」

「くううッ！」

乱暴とも言える速度で腰を振り続ける。

チンポを激しく出し入れして、快感を貪っていく。

できるだけ長くこの快感を味わいたかったけど、どうやらそろそろ限界のようだ。

痛いほどに膨らんだチンポには、マンコの肉ヒダがいやらしく絡み付いていて、これ以上射精を抑え込むのは不可能だった。



「ん、んうっ、荒浜さんっ……ん、くうっ…… んんっ……んひあああッ！！！」

「美紗子……くっ、出すぞ……」



「はいっ……ふああっ、わ、私の中に…… んあっ、だ、出して、くださいっ！」



「荒浜さんの、熱いの……んひいっ、全部…… ああっ、全部……出して……射精して、くださいいいッ！！」

「んっ……んっ……んっ……！」



「ひあんっ！ あんんっ、くっ……んうっ、ん、ん、ふあああッ！ ああああああああッツ！！」



「奥に、ひっ、ふあっ、いっぱい、ん、ああっ、当たって、あ、ああっ、当たって……ん、んんっ……んんんんっ……！！」

「くっ……！」



「んひゃあああああああああああああああ——
——ツツツ！！！！！」

美紗子の中にチンポを深く突っ込んで、亀頭を子宮に押し当てながら射精する。

狭い肉穴の中に熱い感触が広がって、全身がぶるりと震えてしまった。



「はああッ！ な、中に……ん、あッ、いっぱい…… ああッ、すご、ひっ……んん
うううッ！！！」

「くっ……んっ……………！」



「あ、あ……ああ……あああ……………」

美紗子が悲鳴を上げながら、背中を大きく仰け反らせた。

相当に気持ちいいらしいことが、その反応からも察することができる。

マンコの締め付けもかなり強くて、精液が一滴残らず搾り取られる感じだった。

「ああ……」

強烈な快感が体の隅々にまで広がっていく。

気持ちいい。

チンポが溶けるような感じがする。

これがあるから、セックスはやめられない。

これがあるから、美紗子との関係も続けていきたい。

射精する快感を覚えながら、俺はそんなことを考えていた。

やっぱり、結婚よりセックスフレンドの関係のほうが良かった……。



「それじゃあ、今日はお休みなさい」

「帰り道、気をつけてな」



「はい」

俺との行為を終えて程なくして、美紗子が自分の家へと帰っていった。

一時はどうなることかと思ったけど、以前と変わらずやっていけそうだな。

結婚に関しては……俺はする気がないから、地道な説得が必要になりそうだが……。

「ま、気長にやっていくか」

セックスができなくなったわけじゃないんだから、焦って説き伏せる必要はない。

今まで通りの付き合い方をしながら、のんびりとやっていくことにしよう。

その結果がどうなるのかは……あまり考えないことにした。

きっと、なるようになる。

たふんな……。